『過程の演習　新国語問題集』解説

19　西成彦「バイリンガルな白昼夢」

［19］次の文章を読んで、後の問いに答えよ。〈金沢大〉

〔本文1〕地球からひとつ、またひとつと言語が消えていく。今日、これを「言語死」と呼ぶ社会言語学者は少なくない。日本語使用者にとってアイヌ語は何より身近な絶滅危惧種のひとつである。日本語がアイヌ語を絶滅の危機へと追いこんだ。

地球上、言語に死が訪れるその訪れ方はかならずしも一様ではない。日本列島北方域における和人とアイヌとの接触・交渉を遡れば、有史以前まで達するだろう。べつに隣人の言語に精通しあっていたということではないとしても、隣接言語の存在（や気配）について、一円のひとりひとりが認識を共有し合っているという状態を考えるならば、である。エミシ（「愛瀰詩＝蝦夷」）にはエミシ、シャモ（アイヌ語の「隣人」sisamの変形）にはシャモの言語があるということは、おのおのが隣人をそう呼び合っているかぎり、いわば常識だったはずである。

もっとも、本州（島）から北へと渡った者の多くが交易にたずさわる商人層であったことを考えると、そのバイリンガル化は部分的で、一時的なものにとどまった可能性が高い。反対に、和人商人への経済的な依存を深めたアイヌ系先住民族のバイリンガル化は段階的・不可逆的であったにちがいない。松前藩がアイヌによる日本語習得（とくに読み書きのそれ）をタブー視したのは、アイヌの同化が一方的なサクシュのさまたげになるのを危ぶんだせいだろう。この政策はアイヌ系バイリンガルの圧倒的な存在感を物語ると同時に、アイヌ系バイリンガルに対抗できる和人側（注1）通詞の力量を恃めるだけの下地が、その当時には存在したことをもあらわしている。

ともあれ、北海道開拓使設置（一八六九）の時点で、かりに「蝦夷地」におけるアイヌ語の危機が深刻化していたとしても、それはアイヌ自身のアイヌ語離れによるというより、むしろ江戸期の「蝦夷地」における、それこそ（注2）ジェノサイドと呼ぶ以外にないような和人による虐待・陵辱、そして疫病の流行がアイヌ語人口の激減をもたらした結果と捉えるべきだろう。

ところが、明治日本による一方的な統治とともに事態は急変する。和人の組織的入植と、南下するロシアや外国人宣教師の脅威からの保護の名を借りた同化政策は、アイヌ語の存続を可能にする環境そのものに致命的な打撃をくわえた。もちろん、同化政策だけがアイヌ語の威信失墜に手を貸したわけではない。土着の言語と外来の公用語とが共存・並存している地域は、現在でもフィリピン、アンデス高地、パラグアイなど、少なくない。旧「蝦夷地」（＝北海道）のバイリンガル状況をアイヌ語の生存にとってきわめて過酷な状況へと劣化させた何よりも大きな原因は、・リクゾクとして内地各地から押し寄せた**入植者がアイヌ語に対して何ら興味や関心を示さなかった**

ことにある。それまでであれば、アイヌ語を覚えることは和人にとっても・ユカイで有益なことだったはずだ。ところが、明治に入ると、英国人宣教師（注3）ジョン・バチェラーのようにアイヌ語習得に熱意を示した宣教師がそれだけで危険分子かと怪しまれるほど、アイヌ語に対する関心は、言うなれば物好きのレベルへと後退した。アイヌの存在を目障り・耳障りに感じることはあっても、アイヌ系の労働力に依存しようとなど思いつきもしない入植者は、和人だけで自足・完結する傾向にあり、歴史的に言語接触の地であった「蝦夷地」は、いつのまにか**アイヌにだけバイリンガルであることを求める**という**A不均衡な言語空間**と化したのである。そのうち、（注4）モノリンガルであることに何ら不自由を覚えない和人の専横を横目に見ながら、アイヌはバイリンガルである自分に誇りをいだけなくなっていった。「旧土人特設学校」の教員にアイヌ系のバイリンガルが登用されるケースがないわけではなかった。しかし、それとて一時的・便宜的なものにすぎず、アイヌ系の教師は、児童に対して誇り高いバイリンガルたれと促すよりも、アイヌ語から日本語への・ジンソクな切り替えを強いる使命を帯びた。

問2　傍線部A「不均衡な言語空間」とは具体的にどういう空間か。本文に即して説明せよ。［目安］100字

（解答のプロセス）

本文をそのまま使って、

（解答例1）

①入植者はアイヌ語に対して何ら興味や関心を示さず、

②アイヌにだけバイリンガルであることを求める――言語空間。（50字）

あと五十字足すとしたら何か？　なぜ、そうなったのか、という点である。それは、本文に明示されている。

①の理由は、「入植者は、アイヌ系の労働力に依存しようとは思わなかった。和人だけで自足・完結する傾向にあった。」から。

②の理由は、「和人商人への経済的な依存を深めたアイヌ系先住民族のバイリンガル化は段階的・不可逆的であった」から。

これを付け足す。☆**対比**を際だたせて。

（解答例2）「入植者は、アイヌに依存せず、和人だけで自足したため、アイヌ語に対して興味や関心を示さなかった一方、アイヌは和人への経済的な依存を深めたため、日本語を習得せざるを得なかったという（対等でない）言語空間。（93～98字）」

〔本文2〕いかにその民族語に愛着を持っていたとしても、バイリンガルの話し手によって話される民族語の方が、その言語しか使わない話し手によって話される民族語よりも、危機におちいる度合が大きい。

フランスの社会言語学者アジェージュは、モノリンガル話者のマジョリティ化が、バイリンガル話者のマイノリティ化を助長する傾向をとらえて、こう書く。この環境のなかで、稀代のアイヌ系バイリンガルとしてその名を後世に残すことになる知里幸恵が、かりにそうしたアイヌ系バイリンガルのなかで恵まれたエリートの部類に属したとすれば、それは彼女がアイヌの口頭伝承を日本語に置き換えられるだけの言語能力を備えていたからというよりも、そのことに誇りを持て、と金田一京助から力強く背中をおされた、アイヌのなかでも別格的存在だったからである。この誇りをかりにすべてのアイヌの児童に植えつけることができたなら、そのときは知里幸恵ばかりではなく、アイヌ文化を背景に持つ児童のすべてが知里幸恵程度には幸福でありえただろう。しかし、知里幸恵はバイリンガルであることの誇りと喜びを享受できる特権に浴しながら、しかし、ウタリ（＝同胞）とともにこれを分かち合うに十分なだけの人生の残り時間が与えられなかった。**その代わり**、『アイヌ神謡集』（一九二三）という小さな一冊が、誰というのでもない、**Bアイヌ系バイリンガル全員の墓標のような書**として私たちの手に残されることになった。

問3（難）**『アイヌ神謡集』が、傍線部B「アイヌ系バイリンガル全員の墓標のような書」と説明がなされているのはなぜか、本文中の記述を用いながら説明せよ。［目安］110字**

（解答の過程）

▼問題の意図をつかむ。「なぜ」と出題者が問うのは、『アイヌ神謡集』という本を、「墓標」という比喩で表現しているのは、なぜ?という思いがあるからだ。本なのに、墓標？　なんで？　**☆なぜ型のときは必ず、問い自体を問い直せ。**

墓標。それは、消えていく者が後に残すもの。そう置き換えて、傍線部前後を**☆なぜ→どのように型**で書きつづると、

「『アイヌ神謡集』という小さな一冊が、アイヌ系バイリンガルがいなくなってしまった後に私たちの手に残されることになった」ということ。

詳しく書くと、――かつてアイヌ系バイリンガル（アイヌ語＋日本語話者）がいた。彼らは（実際は知里幸恵が）、アイヌ語の「神謡」を日本語に翻訳した。アイヌ系バイリンガルが、日本語しか話さなくなっていくうちに、アイヌ系バイリンガルはいなくなってしまったが、日本語になった『アイヌ神謡集』は残され、それがアイヌ系バイリンガルがいたことの印となっている。「『アイヌ神謡集』は、アイヌ系バイリンガルがいたことの印（しるし）（標（しるし））となっているということ」。これが、「墓標」とはどういうことか、に対する答えである。

これを、なぜ型への答えにすると、

（解答例1）「『アイヌ神謡集』は、アイヌ系バイリンガルがいたけれど、今はいなくなってしまったことを示すものだから。」

しかしこれでは、何か、ショボイ。何が足りない？　文頭の「その代わり」の指示内容が抜けているのだ。「その代わり」アイヌ系バイリンガルは、『アイヌ神謡集』一冊だけを残した。どの代わり？　「アイヌ系バイリンガル全員」の代表・象徴として挙げられているのが、「知里幸恵」。「知里幸恵」を「アイヌ系バイリンガル」で置き換えると、

（解答例2）「『アイヌ神謡集』は、アイヌ系バイリンガルが、その誇りと喜びを享受できる特権に浴しながら、同胞とともにこれを分かち合うに十分なだけの時間が与えられないままいなくなってしまった、その代わりにアイヌ系バイリンガルがいたことを示すものだから。」

さらに「アイヌ系バイリンガルであることの誇りと喜びを享受できる特権に浴しながら、同胞とともにこれを分かち合うに十分なだけの時間」がある、とは、

「その誇りと喜びをすべてのアイヌの児童に植えつけ、アイヌ文化を背景に持つ児童のすべてが幸福でありえた可能性」を指す。しかしその可能性は消え去った。最終段落の、「アイヌ語の影響力が低下しつつあった時代に、その低下を食い止めようとする数々の努力が、その未来を保証されないまま潰されていった過程」は、このことをまとめとして表現した箇所だ。

「墓標」は、あったはずのアイヌ系バイリンガルの可能性と未来が消えてしまったことの印なのである。逆に言うと、『アイヌ神謡集』は、可能性と未来の印でもあった。これを答案に組み込むと百字を超えてくる。

（解答例3）「『アイヌ神謡集』は、アイヌ系バイリンガルであることの誇りと喜びを分かち合い、伝えていく可能性を示すものでもあったが、今やアイヌ系バイリンガルはいなくなり、その未来が消えてしまったことを示すものとして残されているから。」

（107字）

※「アイヌ系バイリンガルはいなくなり、その未来が消えてしまった」の部分は、「アイヌ系バイリンガルはアイヌの言葉を捨て日本語だけを話すようになった」などと言い換え可。

〔本文3〕「北海道旧土人保護法」の制定（一八九九）までを「前近代」として年代区分することを提唱した歴史家の河野本道は、それまでの「半異風文化」が完全に近代日本文化に制圧されていく保護法以降を「近現代」と呼んで「前近代」とは切り分け、この新時代の文化状況を次のように記している。

おおよそあるいは全く近代国家の国民化し、基本的な生活様式が和風化したアイヌ系の者が、過去の文化を局面的に無意識に持ち続けたり、あるいは、それを局面的にこだわりを持って半ば意識的に保持したり、あるいは、それをある種の必要性（研究者への対応のためなど）から意識的に維持し続けたりするといった段階［……］

河野は、アイヌ系先住民族が同化するプロセスの（注5）跛行性を意識しながら、可能なかぎり幅広くアイヌの文化的アイデンティティの様態をくくろうとしている。アイヌにとって、「近現代」とは、意識的であれ無意識であれ、もはや「局面的」にしかアイヌ文化の継承者ではありえない時代だった。知里幸恵や、その祖母モナシノウク、あるいは伯母金成マツのように「ある種の必要性」からアイヌ伝承を「意識的に維持」できたアイヌ人が一方の極にあったかと思えば、「無意識」レベルで、しかも「局面的」にしかアイヌ文化と向き合えず、アイヌ語の効用を実感できない無数のアイヌたちが反対の極を占める。後者にとって、アイヌ文化とはそれこそ気の迷いや気の病程度でしかなくなる。モナシノウクや金成マツや知里幸恵らは、金田一京助によって、アイヌ文化を保持することを精神障害ではなく、民族的知性の健全さの証とみなされた例外的な近代人だったのである。

ここでは、二〇世紀初頭、知里幸恵の書き残したものを読み返しながら、アイヌ（もしくは日本列島北方域の和人）にとってバイリンガル性とは何であったか、またそれが何でありうるのかを考えてみたい。

いまなおアイヌは滅んでなどいない。『アイヌ神謡集』の「序」のなかで、「愛する私たちの先祖が起伏す日頃互に意を通ずる為に用ひた多くの言語、言ひ古し、残し伝へた多くの美しい言葉、それらのものもみんな果敢なく、亡びゆく弱きものと共に消失せてしまふのでせうか」（二ページ）と自分に問いながら、知里幸恵は、あやうく言語文化の滅びと民族の滅びとを混同しそうになったが、生きたアイヌたちは、いまなお私たちのまわりで日常を営んでいるし、ごく普通の日本人と見えた人間が、ある日突然、「アイヌ」を自称する場面を私たちはいつどこででも予想できる。むしろ、**Cひとよりも確実に危機的状況にあるのはアイヌ語の方だ。**アイヌ語の現状はほとんど標本としてのそれで、これを生きた言語としてあやつり、この言葉を用いることの誇りや喜びを人びとが分かち合える機会や契機は、局地的・断片的である。

問4　傍線部C「ひとよりも確実に危機的状況にあるのはアイヌ語の方だ」について、その理由を九十字以上、百十字以内で説明せよ。

①「アイヌ（ひと）は危機的状況ではない」
②「それよりも、アイヌ語の方が危機的だ」
①②それぞれを、**☆どういう状況か**、言い換えると、
①生きたアイヌたちは、いまなお私たちのまわりで日常を営んでいるし、ごく普通の日本人と見えた人間が、ある日突然、「アイヌ」を自称する場面を私たちはいつどこででも予想できる、という状況。→「アイヌ」のＤＮＡ・意識をもつ人間は継続している。
②アイヌ語の現状はほとんど標本としてのそれで、これを生きた言語としてあやつり、この言葉を用いることの誇りや喜びを人びとが分かち合える機会や契機は、局地的・断片的である、という状況。→「アイヌ」語の使用が続く可能性は低い。

これをもとに、

（解答例１―くっつけただけ）「生きたアイヌたちは、いまなお私たちのまわりで日常を営んでいるし、ごく普通の日本人と見えた人間が、ある日突然、「アイヌ」を自称する場面を私たちはいつどこででも予想できることから、「アイヌ」のＤＮＡ・意識をもつ人間は継続している。しかし、アイヌ語の現状はほとんど標本としてのそれで、これを生きた言語としてあやつり、この言葉を用いることの誇りや喜びを人びとが分かち合える機会や契機は、局地的・断片的であることから、「アイヌ」語の使用が続く可能性は低いから。」（225字）

整理して、

（解答例２）「日本人として同化しつつ、アイヌとしての意識を持ち続けている人間はいるが、アイヌ語を生きた言語として使い、その誇りや喜びを人びとが分かち合える機会や契機は、局地的・断片的であるため、アイヌ語の使用が続く可能性は低いから。」（108字）

※局地的・断片的というのは、日常的・継続的ではない、ということ。アイヌ語講座のようなものが催されることがあるが、そのときのアイヌ語は「博物館」の展示物のようなものであり、一定の範囲で日常的継続的に使われる言語としての生命は失われている。

（解答例３――後半のみ？）「アイヌ語の現状はほとんど標本としてのそれで、これを生きた言語としてあやつり、この言葉を用いることの誇りや喜びを人びとが分かち合える機会や契機は、局地的・断片的であることから、「アイヌ」語の使用が続く可能性は低いから。」（108字）

▽一見、字数条件を満たしているように見えるが、これはまるっきりの抜き出し。これで済むというのはありえない。後半（②）に重点があるのはもちろんだが、九十字以上、百十字以内、という指定は、やはり、「ひとよりも／ことばが」危機、の両方にふれて理由を書くことを要求していると見るべきだろう。

〔本文4〕もちろん、絶滅の危機に瀕した言語がふたたび蘇生するケースは皆無ではない。イスラエルで（注6）ヘブライ語に起きたような奇跡がアイヌ語に訪れないとはかぎらない。言語再生の実現には茨の道が待ち受けているだろう。しかし、忘れないようにしよう。バイリンガル状況が「言語死」の前段階であるというアジェージュの説が多くの場合に本当だとして、**D言語再生が実現する土壌もまた、同じバイリンガリズムを足がかりとしないかぎり、開かれてはこないのである。**アイヌ語の未来は、バイリンガリズムの未来である。

ここでの考察は、べつにアイヌ語の再生を正面きって目標に・カカげるものではない。しかし、アイヌ語の影響力が低下しつつあった時代に、その低下を食い止めようとする数々の努力が、その未来を保証されないまま潰されていった過程を考えることは、それとは別の未来がアイヌ語にありえた可能性に広く目を向け直すことに他ならない。いったん潰えた希望、そして未来だからといって、それらは実現不可能性が一度で決定的に証明された希望や未来などではない。

◎問5　傍線部D「言語再生が実現する土壌もまた、同じバイリンガリズムを足がかりとしないかぎり、開かれてはこないのである」とあるが、そのように考えられる理由を、アジェージュの説に言及しながら説明せよ。［目安］100字

内容をしっかりつかむために☆**傍線部を一文全体に延長**し、本文全体をふまえつつ☆**どういうことか**、自問・検討してみよう。例えば次のように敷衍できる。

●「母語だけでは生きていけず、公用語を同時に使わなければ生きていけない状況に陥ることによって、次第に母語が使われる場面や範囲が縮小していき、やがて、その言語は「死」（使う者が消滅すること）を迎えるという経過をたどる。（しかしいったん「死」を迎えたように見える言語が復活した例もある）。もし「死」んだ言語が復活するとしたら、どんな経過をたどるか。（いきなりその言語だけを生活語として使う人々が現れることはないから、死滅した過程とは逆に）公用語を主に使いつつ、先祖の言語を使う機会を少しずつ増やしていく過程を経ることしか考えられない。」

この設問は**〈説明不足〉型**、とでも名づけたいタイプ。もともとの筆者のことばが足りないのである。でも、わからないことはない。しかし、かなりことばを補わないと、つながりを説明できない。出典箇所は恐らく本の前書きか冒頭部分だろうから、筆者としては問題提起としてわざと不足気味に書いていると思われる。

〈説明不足〉型の説明は（変な言い方だけど）、「自分の考え」ですき間を埋めなくてはならない。とはいっても、小論文じゃないから、あくまで本文との整合性を保ち、本文を根拠にして、だけれど。今回の例なら、使う人がなくなった（なくなりかけた）言語が再生するには、どんな条件が必要か、と自問する必要があるということだ。解答例に「別解」が出ていることは、この問いが、**「自分の考え」ですき間を埋めなくてはならない設問**であることの証拠。

（解答例）「母語だけでは生きられない状況が、その言語を使う者が消滅していく事態を導くのなら、もし言語が復活するとしたら、死滅の過程とは逆に、公用語を使いつつ、先祖の言語を使う機会が増えていく過程を経るだろうから。」（100字）

【問題集の解答例】

問1　(1)＝搾取　(2)＝陸続　(3)＝愉快　(4)＝迅速　(5)＝掲

問2　和人の組織的入植と同化政策が行われ、和人はアイヌの労働力に依存せず自足・完結していたのでアイヌ語に関心を示さず、和人に経済的に依存するアイヌのみが日本語を習得する必要に迫られたという言語空間。

問3　知里幸恵のようにアイヌ系バイリンガルとしての誇りと喜びを享受できる可能性があったにもかかわらず、アイヌ語の効用を実感できず、強制されるがまま日本語話者となり、バイリンガルとしての生き方を失ったことを『アイヌ神謡集』は示しているから。

問4　アイヌはいまなお日常を営み、アイヌ民族としての自覚は受け継がれているが、アイヌ語を実生活で使用し、その言語に誇りや喜びを感じ分かち合う機会は局地的・断片的にしか存在しないため、アイヌ語の伝承ができなくなっているから。（108字）

問5　モノリンガルよりバイリンガル話者の民族語が滅びる可能性が高いというアジェージュの説を逆に考えると、絶滅に瀕した言語を日常語として蘇生するには、再度公用語と民族語とのバイリンガル話者を生み出すことが有効であると考えられるから。

［別解］アジェージュの論じるように、外来語とのバイリンガル状況は民族語の滅亡の危機を高めるが、バイリンガル話者によって使用され続けているかぎり、その言語は伝承されていき、契機があればまた広まる可能性が残るから。